The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	位置づけられた身体をもつことと家(ホーム) がもつ意味 : フェミニスト現象学の視点から
Author(s)	Käll, Lisa Folkmarson
Citation	臨床哲学. 2014, 15(2), p. 74-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/29209
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

位置づけられた身体をもつことと家（ホーム）がもつ意味
――フェミニスト現象学の視点から

リサ・フォークマーソン・シェル

主体は関わっている対象を通じてのみ自らをあらわす

（シモーヌ・ド・ボーヴォワール 2004:160）

本稿では、フェミニズムの理論と実践の発展においてもっとも重要とされてきた（また重要であり続けている）位置づけられた身体をもつ（situated embodiment）という問題を、とりわけ、家（home）という概念との関連でこの問題を取り上げます。私は、位置づけられた身体をもった実存と家とのあいだの関係を考察することによって、家という概念に、そして家と女性存在（身体としてのその存在）とあいだの強固な結びつきにアプローチする事を提案します。そして、フェミニスト現象学は、家についての理想化された概念と、家と女性の身体との同一視とがもつ覆いを取り除くことができると主張したいと思います。

最初に、フェミニスト現象学について、いくつか導入となる話を概括的に述べます。その後、とりわけ家という概念に着目して、社会の公的領域と区別された私的領域としての家の確立について具体的にみていきます。続いて、私は、主観性が位置づけられていることを作動志向性（operative intentionality）[i] という言葉で理解していますが、そのような議論を通して、家についての再考を提案します。私は、作動志向性を、以下の２つのことを含んだものとして理解することを提示したいと思います。つまり、１つは、世界へと向かって行くことであり、それは家のなかに位置づけられた自己の拡張を示すことになります。そしてもう１つは、主観性が世界に曝されていること（exposure of subjectivity）であり、それは主観性を取り巻くものおよび家と関係している自己の傷つきやすさ（vulnerability）を明るみにもたらすことになります。

フェミニスト現象学

フェミニスト現象学は、たとえそのように呼ばれなかったとしても、エディット・シュタイン（Edith Stein）やシモーヌ・ド・ボーヴォワール（Simone de Beauvoir）の著作とともにすでに現象学運動の初期の形成において、現象学にとって不可欠の次元であったと言ってよいでしょう。エトムント・フッサール（Edmund Husserl）の〔最初の〕[1]助手であり、フッサールの『イデーン』第二巻の著作において主要な役割を果たしたシュタイン[ii]は、おそらく彼女の宗教的な著述と感情移入に関する著作[iii]でもっとも知られていることでしょう。しかしながら、1930年代の『女性に関するエッセイ（*Essays on Woman; Die Frau*）』（英訳1996）において、シュタインは女性の意識様式と男性の意識様式を現象学的に記述することによって、間主観的関係の同質性と普遍性を疑問に付しました。もっとよく知られていてしばしばフェミニスト現象学の最初の著作として認知されているのは、ボーヴォワールの1949年の古典『第二の性（*The second sex; Le deuxième sexe*）』（英訳2010）です。彼女の先駆的な著作においてボーヴォワールは、女性の存在への問いを現象学的反省にもたらし、女性の従属を説明するための生物学的、心理学的、歴史的な枠組みを吟味することによって、身体をもつ主体（the embodied subject）を根本的に位置づけたのです。性差の問いを現象学的研究の超越論的方法による哲学的な問いとして提起しようとしたボーヴォワールの努力は、彼女の著作を通じて生きており、その後のフェミニスト現象学の発展のための基礎を形成することになったのです。

現象学的研究の方法、すなわち超越論的還元もしくはエポケー（*epoché*）とは、私たちが客観世界としての世界についての判断を宙吊りにし、自明視されている仮定や知識を括弧に入れるという方法論的なステップです。エポケーを行うとき、私は日常生活の素朴な自然的態度から退き、しかし同時に、私の意識としての意識に向かって行き、こうしてまさに意識生の活動が明るみにもたらされることになります。この還元には、対象に焦点を当てることから、対象の与えられ方に焦点を当てることへと、態度を根本的に変化することが含まれています。前面に出て来るのは、意識の志向性（*intentionality*）あるいは方向づけられていること、つまり、意識の作用（ノエシス *noesis*）と意識が意識しているもの（ノエマ *noema*）との解きがたい相関関係です。フッサールは次のように書いています。超越論的エポケーは、哲学者に新しい経験の仕方と思考の仕方を与え、「普遍的な意識生

を覆っている態度」（Husserl 1970:150, §40）の覆いを取りはずすのだ、と。しかしながら、超越論的エポケーによって覆いを取られた態度は、世界から分離された見方ではありません。というのも、その焦点は、経験の特殊な対象ではなく、むしろ経験それ自体の流れに当てられるからです。フランスの現象学者モーリス・メルロ＝ポンティ（Maurice Merleau-Ponty）は、オイゲン・フィンク（Eugen Fink〔フッサール晩年の助手〕）に言及しながら世界に直面した驚き[iv]という言い方で還元を記述する時、この見方を美しく捉えています。メルロ＝ポンティは次のように書いています。

> 反省は世界から退いて、世界の根拠としての意識の統一に向かうのではない。火から出る火の粉のようにもろもろの超越がほとばしり出るのを眺めるために後退するのであり、われわれを世界に結びつけている志向性の糸を緩めて、それをわれわれに知らせるのである。（1962: xiii）

メルロ＝ポンティの説明では、反省において現れるのは、何よりもまず世界に繋ぎ止められていること、すなわち世界との結びつきです。世界は、分離された意識の流れと分離された客観世界としてよりも、むしろ私たちの存在の土台となる基盤として立ち現れます。反省において、世界を対象化する習慣的傾向をやめる時、世界は何であるかから、世界と世界に対する私たちの関係がどのように与えられているかへと、焦点の変化が生じ、また、私たちの存在が世界と密接に絡み合い、また世界のうちに位置づけられ埋め込まれているものとして現れるのです。こうして、超越論的現象学的還元は、〔世界の〕喪失に終わるのではなく、むしろ超越論的主観性という次元を得ることになると考えられるべきです。

現象学的還元もしくはエポケーの方法は、私たちがしつけられ、また異なる制度を通じて様々な仕方で位置づけられ埋め込まれている私たち自身の社会的・文化的・歴史的言説のもつ制約を理解することに取り組むことを要請しています。フッサールにとってこのことは、ほとんど、知識の還元的な数学化を理解すること、また意識と知覚を復権させることを意味しました。しかし今日では、還元あるいはエポケーは、私たち自身の文化的先入見に対する疑いや批判的立場を要請しています。ここで簡単に、シモーヌ・ド・ボーヴォワールが 60 年以上前に女性の存在の意味について研究したなかで、現象学的反省にもたらした性差の場合で例示させてください。ボーヴォワールは、いかに性差が二項対立のヒ

エラルキー的関係として様々な仕方で、たとえば自然科学の説明的な枠組みによって、自然化されてきたかを明るみにもたらしました。医学は、正常な場合の人間存在は男性もしくは女性としていずれかの性を有し、それ以外の変異体は正常に対する例外ないし異常であると私たちに教えます。この枠組みで性は、外性器や遺伝、ホルモン、神経の構造といった異なる特徴によって相互に区別され、明確に線引きされたアイデンティティをもつ特別な何かにされています。洗練された科学的手法がどんどん開発されるにつれ、異なる性がもつ何かであること（*whatness*）もしくは対象性（*objectness*）はいよいよ精密にされますが、この何かであることはまだ自然科学の枠組みのなかで限定されたままです。他方で現象学は、科学の対象、すなわち、そのように異なる性をもつ身体が、いかに理解可能になり、またいかに意識に現れるのかに焦点を当てます。私たちが現象学的還元を行い、科学を通じて世界について知っていることを括弧に入れる時、私たちは科学の対象がどのように私たちに現れるのかを見るという立場にあり、性差の場合には、いかに性差が説明の異なるカテゴリーによって、生まれつきのものとして、また自然化されたものとして現れるのかを見るという立場にいるのです。

こうして、現象学は経験の構造を明らかにすることに、つまり経験の条件に関心をもっています。また、世界は、それが経験される際、ある抽象のプロセスを通じて次第に自然科学によって自明とされている自然主義的な対象に変質され、少なくとも仮説上私たちが完全な知識を得ることのできるような物象化された基盤とされてしまうのですが、そうした抽象のプロセスにも関心をもっています。

フェミニスト現象学の多くは、現象学の伝統において未踏のまま残された経験領域にアプローチするために、現象学の概念道具や方法論的枠組みを用いて、とりわけ女性の経験を注意深い記述にもたらすことに焦点をあててきました。そのような経験には、たとえば、妊娠、出産、月経、乳房をもち授乳すること、自己疎外、摂食障害、性暴力の被害を受けやすいリスクを身体にもつこと、そして否定的なだけでなく肯定的かつ非疎外的な仕方で、自分の身体が主題的な対象として前面に現れる身体的な自己意識などがあります。そのような現象学的記述と分析は、記述可能な経験領野を批判的かつ矯正的に補完し、あるいは拡張するのに役立ちます。フェミニスト現象学におけるこうしたアプローチは、必ずしも明確に現象学的方法や概念を疑ったり変更したりするわけではありません。そうではなく、

哲学者が考えることを怠ってきた経験の範囲全体に注意を払い、通常の日常生活の領域に属するものとして、そのような経験を指摘する点で重要な役割を果たしているのです。さらに、女性の経験についてのフェミニスト現象学の記述は、人間経験にとって普遍的かつ本質的であるとして通用しているものを､限られた集団だけを反省するものに過ぎないと、覆いをはがし、それによって人間経験の視野と構造の理解を豊かにするという企てにとってきわめて重要なのです（Oksala 2004:16-17）。

無視されてきた経験領域がすべて病理学の範疇に属するとは限らず、むしろ女性の日常生活に属している（トランスジェンダーのような性的マイノリティの人々も同様）、（また妊娠や出産という場合は、人類存続のための条件でもあります）ということを実証することによって、フェミニスト現象学は、正常性すなわち人間の正常性および女性と男性の正常性の構成に批判的な光を投げかけます。さらに、間違ってではありますが人間の標準として受け入れられたものについてだけでなく、正常な性を持つ人間であるとみなされたものについても、境界の外にはみ出すという二重の意味で、正常な範囲から逸脱し排除されているような経験の複雑さをも明らかにします。加えて、記述可能な経験領野を補完し豊かにするために現象学的記述の方法を用いることは、多くのフェミニズム理論の発展の中核となってきた経験的な分析に関する議論に重要なパースペクティブを加える限り、より広い理論的な影響力をもっているのです（Fisher 2000；Alcoff 2000）。

記述可能な経験領野を拡大し、これまで無視されてきた経験の範囲全体を注意深い記述にもたらすという作業は、決して終わることのない進行中のプロジェクトであり、非常に重要なものです。しかしながら、それはいずれにしても、フェミニスト現象学を網羅するものではありません。実のところ、ヨハンナ・オクサラ（Johanna Oksala）に従っていえば、フェミニスト現象学を「より一般的な現象学のなかでの局所的なサブテーマに関心をもつ研究」とか、「生きられた身体をもつことの現象学的説明を女性の身体をもつことの説明によって補完し深めること」とかに還元してしまうことはできません（Oksala 2004:17）。フェミニスト現象学が直面している挑戦は、ジェンダーに特有の経験を記述することによって、現象学的記述の領野を単に補足し豊かにすることよりももっと重大なものである、とオクサラは述べています。現象学の概念道具や方法論的枠組みが、フェミニズムの目的にとって信じられないほど資源に富んだものであることが分れば分るほど、

それらは批判的な吟味のもとにおかれなければならないし、フェミニスト現象学者たちによってまさにそうされてきました。現象学を全く退けてしまう代わりに、そうした批判的なフェミニストの疑問は現象学的プロジェクトの限界を指摘し、その発展に貢献してきました。私は、「現象学的な思考の全身に行きわたり、その最も基本的な信条にとことん達している批判的潮流として」（Oksala 2004:17）フェミニスト現象学を特徴づける点で、オクサラに同意するしかありません。フェミニスト現象学者たちは、現象学的でフェミニズム的な分析の枠組みをより充分に統合することによって、たとえば、性差、妊娠、出産といった現象についての独自の研究が、意識経験の出現と人間の誕生の現象学的な分析をいかに根本的に変えてしまうかを、前面に出しました（Oksala 2004；Schües 1997）。この点については、すでにアイリス・マリオン・ヤング（Iris Marion Young 2005）が、妊娠の経験は、身体をもつ主体の統合を解体することを表しており、経験の可能性の条件としての現象学的主体の統一性を問いに付すものである（Cf. Heinämaa 2012）と述べています。

実際、フェミニストの声は、主体もしくは意識の哲学としての現象学の枠組みにおいて差異や他者性を説明する可能性を研究するうえで鍵となってきました。フェミニスト現象学者たちは、主観性がもつ間主観性を強調することに、また主観性および経験を構成しているものとして、自己と他者との相互関係のさまざまな形式を研究することに、気を配ってきました。とりわけフェミニスト現象学の関心を引いたのは、身体的な自己疎外の経験であり、世界における女性の存在の仕方にとって標準的であるように、自己に対する他者として自己を経験することでした（Arp 1995; de Beauvoir 2010; Young 2005）。「男性が彼の身体であるように女性は彼女の身体であるが、女性の身体は女性自身とは別のものである」（2010: 41）というボーヴォワールの洞察を踏まえ、フェミニスト現象学者たちは様々な仕方で問い続けてきました。そこでは、女性の身体的な自己疎外は、アイデンティティのさまざまなカテゴリーと、権力と特権の構造とが交差する接合点になっているのです。

さらに、フェミニスト現象学は、現象学が経験的な諸研究と学際的な諸観点のさまざまな形式に関わって来たという筋道を頼りにしており、また、その初期の結びつき以来頼りにして来た、その仕方によって特徴づけられます。フェミニスト現象学は、身体をもつこ

との構成的な役割、主観性が位置づけられていること、生きられた経験の具体性を強調することによって、経験的研究と現象学的反省のあいだの関係を深めるとともに注意深く考え抜くという両方の作業において重要な役割を担ってきました。そうした取り組みは、それ自身の基盤と前提を厳密に問うことによって特徴づけられる特別な方法論に基づけられた学際的な学問を促進するために独特な立場を、フェミニスト現象学に提供しています[2v]。

家、および私的領域の女性化

さて、フェミニスト現象学の簡単な概括的紹介を終えて、以下では家という概念に向かい、フェミニスト現象学の視点からこの概念にアプローチしていこうと思います。まず、ポリス（polis）の公的領域と対照的関係にある家の確立について、私的領域の女性化について、また女性の存在の概念化と家という概念とのあいだの結びつきについて、少し述べたいと思います。それから、重要な価値として家を論ずるアイリス・マリオン・ヤングの著述の一部にもとづいて（2005: 123-154）、家をフェミニスト現象学的に再評価することに向かいます。

家という概念は、フェミニズムの思想の伝統のなかで何か不安定な位置をしめています。ヤングが書いているように、家は、疑われるのももっともな理由のある、深く相反する価値をもっています。ヤングは、ホメロスの『オデュッセイ（*Odyssey*）』に由来するイメージに注意を向けます。そこでは、王である夫オデュッセウスが勇敢な冒険に出て海を航海している間、妻ペネロペは暖炉に座ってすばらしい織物を織り、家を守り維持しています。これは、西洋文化に広く普及している女らしさのイメージの一つを決定づけているものです。西洋の伝統およびどこか他の所でも、家という私的領域、家庭生活の領域は、強固に女性と結びついてきた領域でしたし、またしばしば女性が閉じ込められてきた領域でした。実際、近代の家父長制社会は、公的領域と私的領域のあいだの区別に基づいて構築され、女性の大部分が後者に制限されていたのです。西洋の伝統では、この区分は古代ギリシャにルーツをもちます。アリストテレスは『政治学』において、家屋ないし家庭さらに家族をも意味するオイコス（*oikos*）と、都市国家を意味するポリス（*polis*）とのあいだの区別を記述し（また規定し）ています。女性は、オイコスに制限され、オイコスでのみ役割をもっていました。彼女たちはそこでギュナイコニティス（*gynaikonitis*：女性の活動領域）

あるいは「女性の回廊」に隔離され続け、事実上、外から見られませんでした。オイコスはまた、男性の活動のために特権化された領域であるアンドロニテイス（*andronitis*：男性の活動領域）を含んでいました。オイコスのキュリオス（*kyrios*：主人）はその家の女性ではなく、むしろ男性でした（Nevett 1999）。

公的領域と私的領域とのあいだの区別と、女性を後者に閉じ込めることとは、西洋文化の歴史を通じて（また世界中の他の諸文化においても）、さまざまな仕方で語られてきました。西洋では、とりわけ英国と（新たに設立された）合衆国では、その区別は 18 世紀末および 19 世紀初頭の産業革命の勃興とともに特別なイデオロギーとして現れました。ここで書きとめて価値のある興味深いことは、二つの領域を区別するというイデオロギーが、大部分生物学的決定論によって形成されたということです。つまり、２つの区別された性があり、それらは相互に排他的で、生物学的仕組みによって異なる社会的役割、職業、空間に生まれつき適しているという考えです。区別された社会領域と役割を規定し正当化するうえで、生物学と自然に言及することは何も新しいことではなく、実は西洋の伝統を通じて広く行きわたっていました（アリストテレスは、社会的秩序を生物学的に正当化する重要人物の 1 人です）。しかしながら、18 世紀末頃になって、生物学に言及することは、科学的生物学的決定論の出現とともに全く新たな次元に進むことになりました。

科学史家のトマス・ラカー（Thomas Laqueur）によれば、性差に関する生物学的決定論についての考えは、科学が（ラカーがそう呼んでいる）ワンセックスモデルからツーセックスモデルへ向かった時、ますます強力になりました [3]。ツーセックスモデルへの変更に伴い二つの性、すなわち女性と男性は、根本的に異なり（序列的関係において）相互に補完的なものとして叙述されていきます。ラカーは、18 世紀後半および 19 世紀初頭に、女性の解剖学的構造、すなわち本質的に男性とは異なる存在として確定されたその特異性に、いかに大きな関心があったかを述べています。女性の解剖学的構造への関心は、女性を本質的に異なる種として確立することに向かいます。もちろん、この女性の解剖学的構造への科学的関心は、知識を増大し科学研究の領域を拡大するという野心と目的に動機づけられていました。しかしながら、科学者たちは今だけでなくその当時も、同時代の文化の規範や期待に影響され動かされています。女性の解剖学的構造に関する新たな発見は、政治的議論の外部でつくられたものではないのです。女性の全身が性的特色を付与され、

女性の本質が確立されるにつれ、科学研究が発見したと主張している女性の特異性は、解剖学の領域よりも他の領域に影響を与えました。また、女性の本質に受動性が刻み込まれました。女性は現代科学の受動的な対象として、つまり能動的な男性科学者によって発見されるべき暗黒大陸としてあらわれたのです[4]。

トリル・モイ（Toril Moi）は、ラカーによって記述されたツーセックスモデルを「性の普及したイメージ」（Moi 1999）と呼び、そのモデルは、人の全体および彼ないし彼女の行動だけでなく、人が接するあらゆるものに浸透しているものとして生物学的性を描くものであり、その結果、活動の種類全体が性を付与され、「あらゆる慣習、身振り、活動が、男性（male）か女性（female）に、男らしさ（masculine）か女らしさ（feminine）に、性別をつけられ、カテゴライズされている」（Moi 1999: 12）と述べています。モイが指摘するように、すっかり広まっているこの性のイメージは、男性と男らしさ、女性と女らしさ、セックスとジェンダーのあいだに何の隙間も残さず、女性の社会的従属は、生物学に言及して説明されます。おそらく同一の不変の力などないにもかかわらず、社会における女性の従属的位置を生物学的に説明することは、私たちが知っているように、いまも用いられており、男性同様に女性は、その生物学的な違いによって、特定の仕方で行動し、社会的文化的生活の特定の領域に属するとしばしば想定されているのです。

生物学的性が社会生活のあらゆる側面にいきわたり、決定づけるのでないにしても特徴づけているという理解は、西洋文化において、公的領域と区別された私的領域として家を確立することと密接な関係をもっています。こうして、区別された二つの領域（私的／家庭的と公的／政治的）の出現は、二項対立的な性差の時代の科学理論によって補強され形成されてきました。科学に言及しながら、家は自然からして〔生まれつき〕（*naturally*）女性の生物学的性によって浸透された女性の領域として確立されて来ました。次いで今度は、女性の存在、すなわち女性の本質が家に属するものとして確立され、実際、家庭生活の私的領域と同一視されました。女性は受動的で、男性に依存しているとみなされ、女性の生物学的生殖能力が、女性を公的領域の活動的な生活に適さないものとし、生まれつき家庭的な領域の生活に向いているものにしていると言われて、女性は夫や子どもたちの世話をし、公的領域のストレスが多くハードな環境から戻った夫に安らぎを与えるとされたのです。

生物学的決定論によってまったく還元的な仕方で、女性を家と、また家を女性の身体と結びつけ、同一視さえするという西洋の伝統における長い歴史を考えると、家という概念が、フェミニズム理論において大いに異議が唱えられてきたことは驚くことではありません。批判的な見方は、いかに家の快適さが歴史的に女性を犠牲にして成り立ってきたかを明らかにしてきました。ヤングに従って言えば、女性は「男性と子どもたちの身体と精神が、世界で名をなすための自信と広がって行く主観性を得るよう、奉仕し養育し維持しながら」、その一方で、女性は「自分自身のアイデンティティと計画のための支え」を奪われているのです（Young 2005: 123）。そのうえ、家が安全と親密な愛情関係に結びつけられる一方で、実際しばしば、家が多くの肉体的、心理的、性的な暴力が生じる場であることを私たちはよく知っています。多くの場合、家庭生活の領域は、暴力の犠牲者に隠れ場所を提供するのではなく、その代わりにその境界を提供し、安全という言葉で家を理想化し概念化するやり方は、暴力行為と抑圧の関係を隠蔽するのに役立っているのです。また、家は異なる仕方で特権に関わる問題であり、常に問題となってきており、また、家がない（ホームレスである）こと（homelessness）は、世界中で極めて差し迫った社会的政治的問題でもあります。

家の概念に疑念をもつあらゆる理由にもかかわらず、ヤングが正しく指摘しているように、「家の概念に対する肯定的な価値を追い払うことは、フェミニストたちにとってさえ困難」（2005: 123）です。家に住まうことは人間の実存の基本的様態であり、家という意味をもつことは、いくつかの重要な点において、私たちが自己という意味をもつという問題であります。ヤングは、家の概念を完全に拒否することに異議を唱え、その代わりに家がもつ価値（彼女は家がもつ四つのそのような価値、すなわち安全、個体化、プライヴァシー、維持という価値を認めています）は特典を知らせているけれども、これらの価値を分析することは現代世界において批判的で政治的な潜在力をもちうる、と論じています。家という概念の意味がフェミニズムの視点から注意深く再考されなくてはならない、という点で、私はヤングに全く同意します。フェミニストたちは、「政治や対立から永久に猶予を与え、男性と子どもたちに慰安を与えることを女性から求め続けるような、家という概念の郷愁的な使用を批判すべきだ」と、ヤングは書いています。しかし、彼女は続けてこう述べます。フェミニズムの政治学は同時に、「家の肯定的な価値を概念化するとともに、

それらの価値をあらゆる人に拡張することのできない、あるいは拡張しようとしない全体的な社会を批判することを要求する」（Young 2005: 151）と。

家についてのフェミニスト現象学は、記述可能な経験の領野を拡大し、これまで無視されてきた経験を注意深い記述にもたらすという、私が先に言及した重要な作業の一部です。現象学的反省の方法を通じて、家について私たちが獲得してきた知識や想定は宙吊りにされ、あるいは括弧に入れられ、家の対象性（*object-ness*）、すなわち家とは何かについてのさまざまな説明から、生きられた経験のうちで家がどのように与えられ構成されているかへと焦点が向けられます。そのような反省は、完全でゆるぎないアイデンティティにとって住まう場所であるという意味よりも、家の概念と経験のもっと複雑な意味を明らかにすることになるでしょう。またそれは、家がしばしば表しているそのようなアイデンティティへの広くはびこっている願望を問いに付すのに役立つかも知れず、また私は言いたいのですが、そうしたアイデンティティは、西洋（おそらく西洋以外でも同様だと私はあえて言いますが）の文化的社会的な想像のうちにある、ほとんど強迫的な願望のようなものといってよいものです。加えて、家についてのフェミニスト現象学は、主観性を理解して、いかに主観性が世界のうちで異なる仕方で身体をもち位置づけられているかを理解するのに貢献することができる、と提案したいと思います。これから私が目を向けるのは、この後者の点です。現象学的な視点、とりわけフェミニスト現象学の視点が（この後の主題のジェンダー化された含意が与えられたなら）、家の概念を再考するためにできると私が提案する作業は、しばしば家によって表されるゆるぎないアイデンティティという覆いを取り除くだけでなく、身体をもつ主観性と家との生き生きした結びつきを指摘し、この結びつきに微妙なニュアンスを含んだ視点を与えることでもあります。

位置づけられ身体をもつこと——曝されることとしての作動志向性

マルティン・ハイデガー（Martin Heidegger）による、住まうという用語での世界内存在の説明[vi]と、リュス・イリガライ（Luce Irigaray）による、固定したアイデンティティへの願望と対照的な流動としてのアイデンティティの主張を頼りにしながら、ヤングは、家という概念を再考することは、少なくとも部分的には、人がもつアイデンティティの意味と家とのあいだの関係に連動されなければならないと述べています。彼女は、「身体

的な日常動作の拡張および表現として特殊な場所に結びつけられている」（Young 2005: 150）ような家の観念を擁護し、「空間の構造への習慣的な順応」（2005: 158）を発達させるプロセスとして、家でくつろぐことの意味を強調しています。家とは、「主観性の特定の様式を定める」（2005: 138）と彼女は書き、この主観性の様式を、「超越の創造的破壊的概念」および「内在の反復」（2005: 138）のいずれからも区別しています。ここでヤングが注意を向けているのは、身体をもち位置づけられているものとして主観性を理解することであり、それによると主観性は、身体をもつこととそれが位置づけられている周囲世界とから分離不能なのですが、他方でまた、世界についてのパースペクティブを持つことによって、この世界から自らを分離するものでもあります。要するに、主観性は、分離した超越にも内在的な物質性にも還元されえないものです。この身体をもち位置づけられている主観性という見方と一致して、自己にとってまったく外的なものとして家を理解することも、家を自己と同一視する傾向（とりわけ家を特定の身体と同一視すること）もともに退けられるのです。

ヤングが提案したように、身体の日常動作の拡張と表現としての家の観念は、生きられた身体をもつことの能動的な運動と、その一部を形成しそれに関与しているような周囲世界に位置づけられていることを指しています。しかし、私たちはこの位置づけられていることをどのように理解すべきでしょうか。位置づけられ生きられた身体がその一部を形成している世界に拡張されると言うことは、何を意味するのでしょうか。身体をもつ自己が位置づけられていることという問題にアプローチするために、私はここで、私が先に言及したエポケーによって前面にもたらされた、身体をもつ意識と世界とのあいだの基本的な結合ないしは結びつきに戻りたいと思います。覚えておられるように、超越論的還元の方法は、志向的な意識に対する対象（何か）としての世界に焦点を当てることから、対象が与えられる諸様態（いかに）に焦点を当てることへの態度の変化を含んでいます。前面にもたらされるのは、意識生の能動性すなわち意識の志向性であり、覚えておられるように、この能動性は世界から分離されていません。むしろエポケーは、対象に向けられた志向性の基盤としての世界と意識とのあいだの結びつきを明らかにします。この結びつきは、作動志向性ということばでメルロ＝ポンティが記述したもので、よく知られているように、彼がフッサールの思考の独自性を探し当てたのは、この非表象的な作動志向性を詳述するなかでのことでした。それは、「志向性の概念を超えて [……]、表象の志向性の下に、他

の人たちがこれまで実存と呼んできたような、より深い志向の発見のうちに見出される」（1962:140，note54）とメルロ＝ポンティは書いています。

こうして、身体をもち位置づけられた自己が周囲環境に対してもつ直接的な関係は、この還元の説明では、作動志向性がもつ関係であり、運動と習慣的な存在様式を通じて身体的に世界に向かっていることがもつ関係なのです。世界内で家に存在することは、切れ目なく機能し中断することのない作動志向性を、すなわち人の実存を支えている物質的、社会的、文化的環境に住まう習慣的様式を示しています。しかしながら、自己と世界のあいだの基本的結びつきは、二つの安定した実体の結びつきではなく、むしろ、変形と生成の結びつきであり、そこでは身体をもつ自己とそれが位置づけられている世界がともに、加えてまた両者の特定の関係が、編み合わせと解きほぐし、一体化と差異化、接近と撤退といった運動において現れるのです。よく知られているように、メルロ＝ポンティは、いかにしてこの結びつきが身体的な次元で知覚と運動を通じて志向的運動と方向性の構造をもつことになるのかを論証しました。「自分の身体を動かすことは、それによって事物に向かうことである」と彼は書き示しています。身体が作動志向的に世界に向かい、その方向のうちで自分を世界から分離するとき（にもかかわらず、身体はなお分離のうちで結びついたままなのですが）、身体は同時に世界と自己とに曝されています。メルロ＝ポンティは、私がたった今引用した文章に続けて次のように書いています。自分の身体を動かすことは、「自分自身にそれ［事物の呼び声］に反応するのを許すことであり、それがいかなる表象からも独立に組み立てられている」と。こうして、身体は、その志向的な運動と世界に向かう方向において、世界内の事物に呼び出されるように、自己自身に向かって一つの方向を曝しています。反省において明るみにでてくる作動志向性は、ここで、生きられた世界および自己の意味が絶えず新たにそこで生じているような出来事において、実存が曝されていることとして、前面にもたらされます。世界が自己に対して存在するようになるとき、自己もまた、世界との関係において存在するようになるのですが、それは、それ自身から手を伸ばし、その手を伸ばすことにおいて、世界へ他者へそれ固有の外部へと曝されることとして、存在するようになるのです。

こうして、私たちが密接に世界に結びつけられている働きとしてメルロ＝ポンティが記述した作動志向性とは、徹頭徹尾、私たちの存在が世界に対して曝されていることである、

というのが私の主張です。私が作動志向的に世界や他者に向けられているとき、私は同時に世界や他者に絶えず曝されており、私の存在のアイデンティティは持続的に関係的な生成なのです。とすると、私たちはこの曝されていることをどのように理解すべきでしょうか。何を曝しており、また何が曝されているのでしょうか。語源的には、その言葉は、何かを外側に、自分の外に置くことを指しています。何かを曝すことは、それを明らかにすること、あるいは目に見えるものにすること、またそれによって、その境界を区切ることです（そして、しばしばこれらの境界は、安定し固定していて本来的かつ真実のものという錯覚を与えます）。曝されることは、隠れ場のない存在という意味をもち、曝されることは、実際におそらく、家なしに存在することです。それは、防御なしにあること、覆われず、あるいは保護されずにあることです。〔例えば〕肌は、焼けつくような太陽や氷のように冷たい風に曝されます。目は光に曝されます。人は暴力や恐怖に曝されることがあります。曝されることは傷つきやすさ（vulnerability）[5] を指し示しています。

位置づけられ身体をもつ自己がその世界へと曝されていることによって示された、この傷つきやすさは、それを概念化する際にはごくありふれていることに反して、否定的な用語で理解されてはいけません。ここでいう傷つきやすさとは、本来の統合され自己充足したアイデンティティを復権するために克服されるべき弱点を表示するような、他の点では完全な個人に対する損失や剥奪をあらわすような意味はありません。そのような理解とはまったく対照的に、私は世界や他者に対する基本的な開けという意味で、ジュディス・バトラー（Judith Butler）の言葉でいえば「身体的生それ自身の一部」（2004: 29）として、傷つきやすさを理解することを擁護します。『生のあやうさ（*Precarious Life*）』のなかでバトラーは、「人間に共通の傷つきやすさ」の場としての身体を強調していて、それは「生それ自身とともに現れ」、その根源を私たちは「それが『自我』の形成に先行する」がゆえに取り戻すことができないのです（Butler 2004: 31）。彼女が慎重に強調しているのは、この人間に共通の傷つきやすさは、「常に異なる仕方で述べられており、権力が様々に差異化されている場の外、とりわけ承認の基準の特異な操作の外では適切に思考することはできない」（Butler 2004: 44）ということです。バトラーの議論と多くは一致して、作動志向性がもつ曝されることの次元としての傷つきやすさは、身体をもち位置づけられた存在、すなわち境界を有し他者と周囲世界に結びついている存在の本質的なアスペクトである、と私は主張します。その上で私は次のことを強調したいと思います。つまり、傷つき

やすさは身体の開けとして、さまざまな仕方で、また異なる切迫度をもって、社会的、文化的、政治的に位置づけられていることに依存しつつ表わされるということ、また、この身体的な傷つきやすさは「逃れる」ことができない一方で、バトラーに従って言えば、傷つきやすさは力と特権の場のうちで表わされ生きられているので、さまざまな仕方で認識され保護されなくてはならないということです。

何かに曝されることは、要するに受動性と開けという非常に基本的なレベルで何かを経験することです。私たちは、知識に曝されている、あるいは世界に、自然や文化や社会に曝されている、ということについて語っています。私たちが曝されていることは、経験のないし経験への開け、つまり私たちの周囲によって触発される能力なのです。その意味で、私たちは常に世界の存在によって、世界のうちで身体をもち位置づけられているおかげで、世界へと曝されています。経験への開けとして、また、私たちに自らを印象づけ押しつけてくる世界への開けとして、曝されることの非常に基本的な意味は、メルロ＝ポンティが論じた身体的な作動志向性の本来の形式を私たちに正しく示しています。また曝されることのこの意味は、それが特定の仕方で外部へと方向づけられたものである限り、志向性の意味に内在している方向という要素ももっています。世界に対する私の基本的かつ必然的結びつきであり、またあらゆる対象に向けられた志向性、分離、隔たり、様々な形の反省のための基盤となっている身体的作動志向性は、同時に、経験に開かれているということによって、世界へと基本的に曝されていることなのです。内から方向づけられていること、あるいは外部へのそれ自身からの拡張（引っ張ること tendere から由来する）である志向性は、同時に、外部としてのそれ自身が曝されていること（暴露）です。内面性は置き換えられ、外界で開かれています。同時に外面性は、まさに内面性の中心で見いだされます。メルロ＝ポンティが主張するように、内部と外部は、「まったく分離不可能である。世界はすべて内部であり、私は完全に私自身の外部にいる」（1962: 401）のです。

さらに言えば、位置づけられた自己が自分が位置づけられた世界に曝されていることは、常に意味に曝されていることであり、このことが家という概念と経験を問ううえでの核心である、と私は主張します。身体をもつ主観性は、常に意味の世界に位置づけられており、その意味はたえず実存の出来事のうちで生じています。私たちのもっとも基本的な運動と知覚は、すでに最初から、それらが現われ形づくられる状況の意味と意義とに浸されてい

ます。メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の序文でそのことを的確に指摘して、世界に埋め込まれ身体をもった存在であるというだけで、「私たちは意味へと運命づけられて」おり、「私たちは歴史のなかで名前を得ることなしに、何かをすることも何かを言うこともできない」（1962: xix）と書いています。私たちがすることや言うことは歴史のなかで名前を得て、それが世界のなかで世代を越えて伝えられるのだから、私たちがそこへと運命づけられている意味は、固定し確固としたものとして理解することはできません。私が自らをそこで見出しそこへと運命づけられている意味は、私の存在を完全に妥協なしに決定するものではなく、同時に、それが意味に浸され意味の真っただ中に位置づけられるのでなければ、私は私自身を表現することもまったくできないのです。沈殿した意味に曝されていることは、常にまた、権力の構造と位置に曝されていることであり、私たちがそこから逃れられないにもかかわらず、私たちの存在（私たちが何者であるか）と私たちの生成の可能性を特徴づけ形成しているような、支配的な言説とカテゴリー化に曝されていることでもあります。この沈殿した意味の現われと力とは、まさしくヤングが家という概念を批判的に再考する際に理解しているものです。ヤングは、純粋な内在に還元された家の概念や、ゆるぎない固定したアイデンティティの理想を表す家の概念を拒否し、生物学的決定論に言及して確立され説明された、家と女性の身体とのあいだの歴史的な含蓄を大いに批判しています。同時に彼女は、安定性、安全性、完全性といった家の概念に結びついている沈殿された意味と価値の力を認めていて、それらの文化的かつ歴史的な形成と、それらが権力や特権の構造から切り離せないことをあばくことによって、そのような意味と価値を慎重かつ批判的に考察しているのです。

家にいる存在の能動性と受動性

ここで作動志向性の構造に注意を向ける私の目的は、身体をもつ主観性が位置づけられていることを特徴づけている二重の運動を指摘することにありました。この二重の運動は家つまり住まうことと家にいることの意味を概念化するうえで生産的だと、私は考えます。作動志向性すなわち位置づけられていることの基底にある結びつきは、位置づけられ身体をもつ自己の側で手を伸ばしたり方向づけられたりすることを含意するとともに、自己が世界へと曝されていることをも含意する、ということを私は論じてきました。家にいることと家という意味をもつこととは、人がそこに住まい、それが人の存在を支え保持してい

るような、自分の身近な環境に能動的に向っている存在の事柄です。そしてまた、自分が住まうことに曝されている存在、すなわち人が住まう場であり、保護と安全を提供することによって概念化されるような家に対して傷つきやすい存在の事柄なのです。

私はメルロ＝ポンティに従い、位置づけられた自己が曝されていることを意味に曝されていることとして、強調してきました。これは、これまで重荷を背負わされて来た家という概念に関係して明確に引き出されて来る、曝されていることの一つの様相です。家はまた、物質性と意味とのあいだ、家にいることと家にいるようになることとのあいだの密接な相互関係が、アイデンティティの物質化と意味形成に関わる事柄であることを、証明しています。ヤングは、家のなかでのアイデンティティの物質化のプロセスに二つのレベルを認めています。一つは、身体的な習慣の拡張として空間の附属物を調整するというレベルです。二つ目は、沈殿した個人的な意味と物語を家の物質的な附属物と特定の物質的空間に組み込むというレベルです（Young 2005: 139）。これら二つのレベルは、決して切り離されず、その分離不可能性は、身体をもつ主観性が位置づけられていることの意味を通して考えるとき、ますます明らかになります。メルロ＝ポンティが論じたように、作動志向性によって世界に位置づけられた存在の基本的様式は、最初から、沈殿した意味に浸されています。それぞれ意味を表しているものは、借りて来られ、習慣化され、たえず変形されて確立された行為、身振り、表現から成っており、その存在が位置づけられていることによって身体をもつことにそれらがつきまとい住み込むことになるのです。私が世界へ物質的に結びついていることと、私が世界と世界の一部としての私自身についてもつ「肉の感覚（fleshy sense）」とは、同じ程度に、社会的、文化的、歴史的な感覚でもあります。そして、意味というのは、いかなる分離や抽象にも先立って、徹底して身体をもった物質的なものとして理解されなければなりません。意味とは感覚（sense）であり、その言葉が示唆しているように、感じること、感覚すること、つまり身体をもつ物質的な実存の感覚し感覚される次元を含んでいます。身体がもつ社会的な世界との関係は、ロザリン・ディプローズ（Rosalyn Diprose）の言葉を借りて言えば、「世界との関係から分離不可能であり、それと同じ秩序をもち、対象化の関係ではなく、反省的判断に先行して、肉体的に絡み合っている」（2002: 104）のです。多くの仕方で、家が、行為者の意味にとっての物質的かつ社会文化的なよりどころとなる基盤として、また、変化し流動する個人のアイデンティティを実現する場として（Young 2005: 149，155）現われることは、感覚の物質

性と物質性の意味とを表しているのです。

さらに、住まうことと家にいることで位置づけられていることを作動志向性という用語で理解することは、反復する受動性よりもむしろ志向的かつ変化する能動性と考えられる、家の維持ということに焦点を当てることになりますが、それはこれまでしばしばそのように概念化されてきた仕方です。このように変化する能動性として家の維持に焦点を当てることは、伝統的に女性によって行われてきた労働と、女性らしさと結びつけられ、また生物学的決定論のイデオロギーによって女性の本質と結びつけられてきた存在との再評価を引き起こします。そのような再評価を拡張することには、しばしば家と結びついてきたゆるぎないアイデンティティという理想だけでなく、家と女性とのあいだの強固な結びつきを批判的に再考することも含まれます。作動志向性の基本的な結びつきを変化の運動として強調することによって、私はその代わりに、ヤングに従いつつ、流動的で、部分的で、変化し、関係的かつ基本的に間主観的な（同様に間身体的な intercorporeal）ものとして理解された主観性の生成を支えるものとして、家という概念を主張したいと思います。

参考文献

- Ahmed, Sarah. 2006. *Queer Phenomenology: Orientations, Objects, Others*. Durham, NC: Duke University Press.
- Alcoff, Linda Martín. 2000. “Phenomenology, Post-structuralism and Feminist Theory・ on the Concept of Experience.” In *Feminist Phenomenology*, edited by Linda Fisher and Lester Embree, 39-56. Dordrecht: Kluwer: 2000.
- Al-Saji, Alia. 2010. “Bodies and Sensings: On the Uses of Husserlian Phenomenology for Feminist Theory.” *Continental Philosophy* Review 43: 13-37.
- Arp, Kristana. 1995. “Beauvoir's Concept of Bodily Alienation.” In *Feminist Interpretations of Simone de Beauvoir*, edited by Margaret A. Simons, 161-177. University Park, PA: The Pennsylvania State University Press.
- Beauvoir, Simone de. 2010. *The Second Sex*. Translated by Constance Borde and Sheila Malovany-Chevalier. New York: Alfred A. Knopf.

- Butler, Judith. 2004. *Precarious Life*. London & New York: Verso.
- Diprose, Rosalyn. 2002. *Corporeal Generosity: On Giving with Nietzsche, Merleau-Ponty, and Levinas. Albany*: SUNY Press.
- Fisher, Linda. 2000. "Phenomenology and Feminism: Perspectives on Their Relation." In *Feminist Phenomenology,* edited by Linda Fisher and Lester Embree, 17-38. Dordrecht: Kluwer: 2000.
- Heinämaa, Sara. 2012. "Beauvoir and Husserl: An Unorthodox Approach to The Second Sex. In: *Beauvoir and Western Thought from Plato to Butler*, edited by Shannon M. Mussett and William S. Wilkerson. Albany: SUNY Press.
- Horowitz, Maryanne Cline. 1976. "Aristotle and Woman" ,*Journal of the History of Biology* 1976: 2, 183-213.
- Husserl, Edmund. 1970. *The Crisis of European Sciences and Transcendental Phenomenology*. Translated by David Carr. Evanston: Northwestern University Press.
- Johannisson, Karin. 1994. *Den mörka kontinenten. Kvinnan, medicinen och fin de siècle*. Stockholm & Stehag: Brutus Östlings Bokförlag Symposion.
- Laqueur, Thomas. 1990. *Making Sex. Body and Gender from the Greeks to Freud*. Cambridge: Harvard University Press.
- Merleau-Ponty, Maurice. 1962. *Phenomenology of Perception*. London & New York: Routledge.
- Moi, Toril. 1999. *What is a Woman?*. Oxford & New York: Oxford University Press.
- Nevett, Lisa C. 1999. *House and Society in the Ancient Greek World*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oksala, Johanna. 2004. "What is Feminist Phenomenology? Thinking Birth Philosophically." *Radical Philosophy* 126: 16-22.
- Schües, Christina. 1997. "The Birth of Difference." *Human Studies* 20(2): 243-252.
- Stein, Edith. 1996. *Essays on Woman. The Collected Works of Edith Stein II.* Translated by Freda Mary Oben. Washington: ICS Publications.
- Young, Iris Marion. 2005. *On Female Body Experience: "Throwing Like a Girl" and Other Essays*. Oxford: Oxford University Press.

注

1　〔　〕内は、訳者による補足。また、この箇所以外のアラビア数字は原注で脚注とし、ラテン数字は訳注で文末注としている。

2　フェミニスト現象学の領域は、近年、クイア理論、ポストコロニアル研究、批判的人種理論、障害学といった分野でさらに活発になってきている（Ahmed 2006; Al-Saji 2010）。これら最近のフェミニスト現象学の諸潮流は、たとえば性差、セクシャリティ、人種、エスニシティに関する問題にアプローチすることにとっての現象学の決定的な重要性のみならず、そのような諸問題が現象学の領野と概念と方法の持続的な発展においてもちうる豊富な影響力を証明し続けている。

3　性差を制作することについての彼の研究（Making Sex. Body and Gender from the Greeks to Freud）において、ラカーは非常に説得的な仕方で、政治的な変化がいかに人間の身体、とりわけ女性の身体の概念を弁証法的に変えてきたかを示している。18 世紀末以前は、男性と女性の性差はアリストテレスのパラダイムによって理解され、女性は男性と連続体でありながら劣った発達をする男性の変異体とみなされていた、とラカーは書いている。２つの性の解剖学的構造は、このモデルでは本来は相互に異なっているとは考えられていない。むしろ、それらは、同じ一組の器官の２つの異なる配置とみられている。つまり、男性の生殖器官は女性のそれよりも発達した型と考えられている。女性の身体は、不完全な男性の身体と考えられ、女性の生殖器は、器官を内翻されているだけで男性の生殖器と同一のものと理解されている。補完的かつ相互に排他的なものとして解剖学的差異をみる代わりに、ワンセックスモデルは２つの性を同一の完成度のスケール上における序列的な関係として描いている。それに従うと、女性は人間を完成させている男性との関係において不完全であると宣告される。アリストテレスの生物学においては、女性の身体は男性の身体と原理的に同一であり、男性の身体に対して何ら欠けてはいないのだが、にもかかわらず、女性の劣等性が説明されるのは欠陥に言及することによってである。アリストテレスによれば、男性に備わっているものはすべて女性にも備わっているが、十分に発達しておらず、無能で受動的である。重要性は、特定の部分や性質があることに帰せられるのではなく、これらの性質が能動的に完全性にもたらされる程度に帰せられる。こうして、女性はそのような性質そのものに欠けているのではなく、女性が能動性の力を欠いているので、男性に対して不完全であるといまだ考えられている。アリストテレスの『政治学』を参照。*The Politics*, 1260a, p.95. Cf. 1254b, p.68; 1335a, p.45. マリアンヌ・クライン・ホロヴィッツ（Maryanne Cline Horowitz, 1976) は、女性の政治的劣等性と生物学的劣等性のあいだの明確な平行性を描いている。彼女は、アリストテレスが、女性は生物学的に不完全であるという主張とともに、女性は生まれつき

男性によって支配されるという考えを支持していた、と書いている。

4　私は、暗黒大陸というこのメタファーをカーリン・ヨハンニッソン（Karin Johannisson）の著作（*Den Mörka Kontinenten*, 1994）のタイトルから借りている。その序文で彼女が述べているところによれば、彼女は彼女で、それをフロイトから借りている。女性の存在を性的に特色づけることは、女性の身体とセクシャリティを医療化することへの扉を開き、数多くの生殖器の外科手術の手順が開発され実施された。ヒステリーや淫乱といった女性に典型的な「病理学的な」行動を「治療」するために、まったく健康な器官が切除された。大いに議論を呼ぶ陰核切除術を導入した 19 世紀の外科医アイザック・ベイカー・ブラウン（Isaac Baker Brown）に言及しながら、ヨハンニッソンは、期待された女性らしい行動に適合しそこなうという一般的傾向が病理的なものとして定義され、健康な性器および生殖器を切除する根拠として役立ったと書いている（1994:200）。

5　曝すことという言葉は、「現実」「真理」「真正」といった含意が重々しく負荷されている。それは覆いをとられ、仮面をはがされ、明るみに出されることのできる、現象の下に隠れている何かがあることを示している。曝すことはある意味では結局のところアレーテイア（Aletheia：真理）のヴェールを取ることである。曝すことの含意はしばしば「真理」であり、つまり隠され忘れられたままではあり得ない真理を露わにすることであると理解されている。

訳注

i　フッサールは、顕在的な志向性の周辺（庭、背景）ですでに非顕在的な志向性が作動していると述べ、晩年には、後者を「作動しつつある志向性（fungierende Intentionalität）」と呼んでいた。これは、まだ顕在化されていない受動的な次元でいつもすでに働いている志向性のことである。フィンクやメルロ＝ポンティも、前者を「作用志向性」と呼び、後者を「作動志向性」（l'intentionalité opérante）と呼んで区別した（『現象学事典』の「作動しつつある志向性／作用志向性」の項目を参照）。

ii　フッサールは『イデーン』第２巻のための草稿をシュタインに託し編集を依頼したが、その編集に満足が行かず、生前は未刊行のまま残され、その編集に基づくマーリー・ビーメルの編集により、現在はフッサール全集の第４巻として刊行されている。しかし、いろいろと問題点も指摘されており、現在、新たな編集作業が進んでいるようである。

iii　Stein, Edith. *Zum Problem der Einfühlung*. Halle, 1917.

iv　Merleau-Ponty, Maurice. *Phénoménologie de la Perception*, Éditions Gellimard, 1945, p.VIII: Eugen Fink. Die phänomenologische Philosophie Edmund Husserls in der gegenwärtigen Kritik, Kantstudien,

1933, pp.331f.

[v] 原注にある「クイア理論」とは、語源的には「ゆがんだ、曲がった」を意味する低地ドイツ語に由来する。「クイア（Queer）」は、19 世紀後半から非異性愛者に対する侮蔑語として使われて来たが、それを逆手に取って、非異性愛者たちが、自らを異性愛主義や性別二元制から自由であることを肯定し、また誇りをもった自称した「奪還語」として使うようになり、さらに、先駆的で代表的な論者であるジュディス・バトラーによって、あらゆる実体化の拒否という姿勢を表すものとして使われることで、近代の主体やアイデンティティ概念の根底的な書き換えをしようとする理論となったものである。

[vi] Heidegger, Martin: Bauen, Wohnen Denken. In: *Vorträge und Aufsätze*. Stuttgart: Neske, 1994.

（訳：高山佳子・浜渦辰二）